



「カラフル」を読んで

上原中学校 一年一組 徳渕 愛美

私は、はっと目が覚める思いだった。「人は自分でも気づかないところで、だれかを救ったり苦しめたりしている。この世があまりにもカラフルだから、ぼくらはいつも迷っている。どれがほんとの色だかわからなくて、どれが自分の色だかわからなくて。」というぼくのこの言葉が、もやもやとしていた私の世界をキラキラとした虹色に変えたからだ。

他人のイメージを変えることは、とても難しい。特に一度植え付いてしまった悪いイメージは、なかなか変えられるものではない。第一印象が最悪だったり、悪い噂を聞いたりすると、その相手と距離を置いたり、自然な付き合いができなくなるということもしばしばだ。私も、そうなりたくないという意に反して、良い印象の人とつながっていることが多い気がする。主人公の「ぼく」もそうだった。天使に導かれた彼の魂は、「真」という自殺未遂をした少年の体に、仮住まいをすることになる。ぼくの中の真の家族は最悪な印象しかなく、当然のごとくぼくは家族と距離を置くようになる。私がぼくだったら、もちろんそうしていただろう。だから、私は、いつの間にかぼくに親近感を感じていた。しかし、物語が進むにつれ、その親近感が良い意味で裏切られ、私のぼくへの気持ちは尊敬へと変わっていった。なぜなら、彼は真として過ごすうちに自己中心的だと決めつけていた父の中にある、自分への優しさを

深い愛情に気づくことができたからだ。母や兄に対しても同じだった。二人が、赤青黄色といった様々な色、想いを持ち合わせていることに気づいたのだ。それどころが、それらすべてのイメージを、彼らを彩る性質として、何一つ否定しなかったのだ。悪い人、良い人、と簡単な言葉でその人自身を決めつけて、一つの側面からしか人を見ていなかった私にとつてそれは大きな衝撃だった。

私の母は、「物や人をいろんな視点から見とらん。」と、よく言っている。妹や弟を怒る時も、悪口を言った弟、言われた妹、双方の意見を聞いた上で、二人の良かったところ、悪かったところをじっくりと話している場面をよく見る。人付き合いにしても、誰かとトラブルがあっても、それだけで相手を判断したりしない。行き違いがあったのねと、相手と自分の反省点、どうすれば良かったのか、今後どうすればトラブルは防げるのかなんてとところまで考えている。今まで、私にとって母のその考えは、とても面倒なものだった。悪口は言った方が悪いのだし、暴力はふるった方が悪い。トラブルなんて起きるような相手とは、深く関わらなければいい。そう思っていた自分が、いかに浅はかで、小さい人間だったことかと今となつてはとても恥ずかしい。みにくい色ときれいな色、暗い色と明るい色、一見すると相反する色、それぞれが互いに活かしあい、その人を形作っているのだ。一見すると汚く見えるものも、光が当たれば澄んだ白になる。角度を変えてみることで、人の性格や、事実なんて何色にもなり得るのだ。面倒だと思えた母の言葉は様々な人

が生きる世界で、より楽しくいきっていくための最高のアドバイスだったのだ、と今の私は自信をもって言える。それは、ぼくが、自分自身の経験を通じて、私に教えてくれたからだ。この世界も人も一色ではない、こんなにも色とりどりなのだ。だからこそ、素敵なのだ。

一度きりの人生だから、私たちは、無意識に自分の視野を狭めているのかもしれない。それは、取り返しのつかないことへの恐怖や後悔の念が、強く心に刻み込まれているからだろう。しかし、長い十数年は、角度を変えて地球の歴史なんかから見れば、たかだか数十年だ。ぼくがそうだったように、「ホームステイをしているんだ」と、肩の力をぬいて気軽に構えていればいいのだ。そうすれば、一見すると不可能だなんてことも、解決への糸口が、可能性が、己ずと見えてくるのではないだろうか。

私が試験に合格した裏では、不合格で悔しがっている子がいるかもしれない。あの子が友達を叩いたのは、大好きなお母さんの悪口を言われたことを撤回して欲しいという、お母さんへの愛情からだったかもしれない。私たちの生きるこの世界は、実に「カラフル」な人や出来事であふれている。一分先、一日先、一年先にはどんな「カラフル」な出会いが、事件が待ち受けているのだろうか。私は大人になっても、このキラキラとした気持ちを持ち続けていきたい。